『源平盛衰記』の白山関係記事

辻本恭子

はじめに

白山とは、現石川県・福井県・岐阜県の境にある山で、御前峰・大汝峰・別山などを総称して言う。この内、御前峰に登拝することを禅定と称し、その禅定道の起点として加賀・越前・美濃の三方に馬場が開かれると、それぞれが白山信仰の拠点として勢力を競うこととなった。

十世紀中頃に、御前峰の神はイザナミで白山妙理菩薩と号し本地が十一面観音、大汝峰はオオナムチの神で本地が阿弥陀如来、別山は小白山大行事で本地が聖観音であるとする『泰澄和尚伝記』が成立してからは(1)、この本地垂迹説による伝承が白山信仰の核に据えられた。そして、以後三馬場はすべて泰澄が創めたとする開基縁起に一元化され、白山三所権現を基本とする信仰が展開することになる(2)。『私聚百因縁集』には、空海と丹生明神や円仁と赤山明神と同様に泰澄と白山権現が併せて書かれ、室町期などに作成された「白山曼荼羅」には大汝峰・御前峰・別山の白山三峰の山の姿、祭神、本地仏が描かれた。

他の平家諸本と同じく、盛衰記にも白山に触れた記述が数箇所収められている。これまでに、主に明神関係の独自

記事を対象として盛衰記と叡山文化圏との接触を想定してきたが、本稿では白山関係の記事について、延慶本・長門本と比較しながら考察したい。

一、盛衰記と延慶本・長門本

1　白山関係記事全般について

最初に盛衰記に白山の名が見えるのは、巻第四の「白山神輿登山」の事を中心にした一連の記事である。この記事については後述するが、注目しておきたいのは、この事件を描く中で盛衰記が簡略にではあるが白山縁起を書いているという点である。延慶本・長門本には、ここにこのような記述はない。

次に巻第六「西光父子亡」の記事中では、白山事件の顚末を概観する部分で西光・師高父子が「白山妙理権現ノ神田講田没倒シ」とあり、事件の背後に所領争いがあったことを伺わせる記事となっている（事件そのものを描いた巻四では、師高らの横暴は他本と同じく湯屋で馬を洗ったことに集約されていた）。延慶本・長門本の該当箇所を見てみると、両本とも事件の概略を繰り返すことはしない(3)。

巻第八の「法皇三井灌頂」では、法皇が山門衆徒の反対で三井寺での灌頂を断念したという記述の中に「但先師大僧正治山ノ時、北国白山ヲ山門ニ可賜之由致訴訟刻、甚深ノ以道理被仰下ニ付テ、三箇年ノ間加制止ト云ヘドモ、山徒ノ訴弥以テ熾盛ナルニ依テ、終ニ以テ蒙裁許畢ヌ」という一文がある。これは巻四の白山事件の記事中で既に言及されている。鳥羽院のとき、白山の平泉寺を園城寺に付けようとしたところ山門大衆の猛反対に遭い、結局平泉寺を延暦寺の末寺としたというものがそれで、延慶本・長門本も、白山事件を描く中では、山門の奏状と院宣の二通の文書を収めたこの記事を持つが、法皇灌頂を描くこの場面では繰り返さない。

巻第二十九「三箇馬場願書」、「新八幡宮願書」の記事も白山に触れている。三箇馬場願書については後述するので、ここでは「新八幡宮願書」を比較する。読み本三本では、義仲は倶梨伽羅合戦に先立って白山と八幡の両方に願書を納めているが、盛衰記はここで「此僧（＝大夫房覚明）ハ本ハ勧学院ノ文章博士、進士蔵人通広ト云ケル者也。出家シテ西乗坊信救ト名ヲツキテ、南都ニ便宜ノ物書シテ居タリケル程ニ（中略）行家参河ノ国府ヨリ伊勢太神宮ヘ進ケル祭文モ、此信救ゾ書ケル。行家兵衛佐ニ中違テ信濃ヘ越ケル時、又木曾ニ思付ニケリ。木曾信救ヲ改テ古山法師ニ造成テ、木曾大夫坊覚明ト呼。白山三箇之馬場願書ヲモ此覚明書タリ」と、伊勢への祭文や八幡への願書と同じく、白山への願書も覚明が書いたとする。延慶本・長門本は白山への願書が誰の手によって書かれたのかは具体的に述べず、八幡願書の後にこの盛衰記のような記述もない。また、盛衰記のこの箇所に該当する覚明の略歴は、延慶本・長門本ではもう少し後の義仲の山門牒状の個所にあるが、そこでも伊勢の祭文に関しては触れるものの、白山願書に付いては書かれていない。延慶・長門両本の八幡願書奉納の場面では、覚明に注目すると先に収めてある白山願書が唐突に差しこまれている感があるのに対し、盛衰記は両方の願書が共に覚明の手になるものであることが自然と理解できるよう、文言を補っていると考えられる。

巻第二十九の「砥並山合戦」では合戦に際しての霊験が描かれているが、盛衰記には、延慶・長門本にはない垣生新八幡霊験譚が挿入されている。しかし、この霊験譚で倶梨伽羅山での平家軍の潰走を八幡の計らいとしているにも関わらず、話の末には延慶本・長門本と同様にこの勝利を「偏ニ白山権現ノ御計」とも書く。これは、戦に先立って白山・八幡両方に願書を納めているために、この勝利を白山の計らいだけには留められなかったためと考える。この後倶梨伽羅谷から火炎が立ち上るという霊験は三本ともに載せる記事であるが、盛衰記は、簡略ではあるが金剣宮の本地に言及している点で異なる。

最後に、巻第三十三の「木曾備中下向斉明被討並兼康討倉光」では、水島合戦から室山合戦までの間の倉光が討たれたことを描く部分に白山の語が見える。ここでは倉光の討死を神の咎・人の怨の報によるものとしているが、その原因として「倉光ハ北国ノ住人ナガラ、案内者立テ此彼アナグリ行、昔ヨリ馬ノ鼻モムカヌ白山権現ノ御領、末寺末社ノ庄園ヲ没倒シ、神事仏事ノ供米ヲ押領シ、剰又平泉寺ノ長吏斉明威儀師ガ被宥シヲモ、種々ニ讒訴シテ六条河原ニテ刎首ナドシタリシカバ」と、横暴な行為があったことを挙げる。ここは延慶本・長門本がほぼ同じ表現で、盛衰記がやや異なるものの、大意は同じであると言えよう。

以上、盛衰記に「白山」の語が見える部分の三本比較をしてきたが、盛衰記は、他本にはない縁起を挿入し、白山事件の顚末を手短に繰り返し、二通の願書を納める場面では白山への願書をうまく流れの中に収めるなど、他の二本よりもより白山に関する記述が丁寧であると読むことが出来ると思う。

2　白山事件と、木曾願書について

盛衰記巻第四に、加賀の国の目代の横暴に端を発した一連の騒動、いわゆる「白山事件」の顚末を描く部分がある。白山事件は安元事件とも称され、白山で加賀の目代が寺を焼き、白山衆徒が本山である叡山に神輿を掲げて訴え出、叡山の申し立てによって加賀国の目代が配流になったという事件である。加賀の国における実際の事件の顚末は記されていないが、白山の衆徒が叡山に訴訟に赴き、目代の配流を求めて山門衆徒が都に神輿を振り入れたこと、最終的に加賀の目代が配流になったことや、一連の騒動に関して天台座主明雲が流される事になり、その途中で大衆らが座主を奪還したことなどは、『百錬抄』や『玉葉』のほか、いくつかの資料で確認することができる。

この、加賀の目代の狼藉、白山末寺焼討、白山神輿登山にはじまり、七社の神輿参内や座主配流へと展開する一連

の騒動を、読み本三本がどのように描いているかを確認してみると、延慶本・長門本が近い関係にあり、盛衰記はそれら二本とは異なっているという事が分かる。特に、白山での騒動を経て、白山大衆が神輿を担いで動き出してからの盛衰記の描写には、延慶・長門両本と大きな差がある。十二世紀中頃から十五世紀前半の成立と考えられ、白山の加賀側で正統な資料と目される『白山之記』にもこの事件関係の記述があるが、寺社列挙の順番については、盛衰記の方が『白山之記』よりも地理的に正確に寺社を並べているという指摘もある(4)。

また、一連の事件に関わる文書を、延慶本の四種、長門本の五種に対して盛衰記は九種収めている。

表一　白山事件記事に収録された、事件関連文書

盛衰記	延慶本	長門本	備考
留守所より白山中宮衆徒へ牒状	○	○	
衆徒ら返牒	○	○	
延暦寺政所から白山衆徒への寺牒			
白山中宮衆徒の返牒	○	○	
天台座主宛の院宣			
師高解官尾張へ配流の宣旨	○	○	同文ではないが、玉葉に文書あり
明法博士へ明雲の罪名を尋ねる宣旨			玉葉に宣旨本文有り
明雲遠流の風聞を受け、山門衆徒ら奏状			
山門落書（平清盛宛山門大衆書状）		○	

白山事件記述における文書について、延慶本に関しては安藤淑江氏の論があり、氏はこれらの文書の出所を延暦寺及びその周辺と想定されている(5)。鈴木彰氏は、平家物語は既存の文書を活用しながら、物語が求める事件像を持つ白山事件を創出したとされ(6)、また盛衰記の収める文書は既存の資料に依拠したものとは限らず、創出されたもので

あることも有り得ると指摘された。ここに収録されている文書の内、四部本にも載る師高解官尾張へ配流の宣旨は、文言は違うものの玉葉によって確認することが出来、盛衰記のみが持つ明法博士へ明雲の罪名を尋ねる宣旨も、同文のものが玉葉に収録されている。しかし、鈴木氏のご指摘の通り、その他の文書についてはこれを即実在の外部資料と結びつけることは出来ない。ただ、盛衰記は事件の記述にあたって文書を積極的に活用していることは分かる。これは、文書によって事件の描写に現実味を持たせ、より具体的に描出しようとする姿勢の表れではないだろうか。

さらに、事件の顚末を詳述する中で、白山神輿登山に関して盛衰記には独自記事が含まれている。それは、「比叡辻の神主の夢」として描かれた霊験譚である。

比叡辻ノ神主ガ夢ニ見タリケルハ、戸津比叡辻ノ浦ニ、イミジク飾尋常ナル船七艘有。日中ナルニ篝ヲ燃ス。舟ゴトニ狩衣ニ玉襷アゲタル者ノ、北へ向テ舟ヲ漕。「イカナル人ノ御物詣ゾ」ト問バ、「白山権現ノ神輿ノ御上洛之間、御迎ニトテ山王ノ出サセ給御舟也」ト申。角云者ノ姿ヲミレバ、身ハ人、面ハ猿ニテゾ有ケル。打驚タレバ、汗身ニアマレリ。不思議ヤト思立出テ四方ヲ見渡セバ、此山ヨリ黒雲一叢引渡、雷電ヒヾキテ氷ノ雨フリ、能美ノ山ノ峯ツヾキ、塩津、海津、伊吹ノ山、比良ノ裾野、和邇、片田、比叡山、唐崎、志賀、三井寺ニ至マデ、皆白平ニ雪ゾ降。十四日ノ子時ニハ、客人ノ宮ノ拝殿へ奉レ入。客人ノ神明ハ金ノ扉ヲ押開、早松ノ明神ハ錦ノ帳ヲ巻揚テ、御訴訟ノ有様御物語モヤ有ラント、身ノ毛堅テゾ覚エケル。

（巻第四「白山神輿登山」）

これは他本に見えない記事であるが、語り本の次の部分との関連が考えられる。

同八月十二日の午の刻計、白山の神輿、既に比叡山東坂本につかせ給ふと云程こそありけれ、北国の方より、雷緩しく鳴ッて、都をさしてなりのぼる。白雪くだりて地をうづみ、山上洛中おしなべて、常葉の山の梢まで、皆白妙になりにけり。

（覚一本　巻第一「俊寛沙汰　鵜川軍」）

実際に雪が降ったかどうかは別として、あるいは局地的な天候の変化があったのかもしれない。しかしそれを書き

とめるのに、盛衰記では覚一本のように雷雨と降雪を描くのみではなく、神主の夢を借りて山王と白山の早松の明神の化現譚に仕上げ、また実際に叡山から周囲をながめ、はるかに白山を見はるかしているかのように具体的な地名を列挙しているのである。この、白山絡みの霊験として時ならぬ季節に雪が降るというのは、「日吉客人宮者白山権現云々。依二或人夢想一。造二小社一。所レ奉二祝居一也。而慶命座主之時。無二指証據一者。无レ詮小社也。又可二御坐一者。可レ被レ示二不思議一云々。件夜入二座主之夢一有二託宣之旨等一。後朝小社上許。白雪一尺許積タリケリ。六月云々。其後霊験掲焉云々」(7)という『古事談』の説話も連想させる。山岸共氏も「白山権現影向降臨の際　奇瑞として語られるのは降雪であった。長谷寺影向の際も雪が降ったと語られている。熊野権現を象徴するのはなぎであり、白山権現を象徴するのは雪であった」と指摘されている(8)。

以上のように、諸本に描かれた白山事件の中でも、盛衰記の記述は文書の積極的な収集、白山神輿が叡山に向かう道々の描写、霊験譚の挿入など、白山に関わるこの事件を、他本より興味を持って丁寧に描いていると考えられるのである。

巻第二十九では、義仲が戦に先立って白山へ願書を奉納したことが描かれる。義仲らの動きに対して都で北国追討の宣旨が下され、四月十七日に平家軍が北国に向けて出立し、いわゆる「倶梨伽羅落し」で大敗を喫するという平家の記事を玉葉で確認してみると、次の通りである。

征討将軍等、或以前、或以後、次第発向、今日皆了云々（四月廿三日）

伝聞、去月廿六日官軍攻二入越前国一云々（五月一日）

伝聞、去三日官軍攻二入加賀国一合戦、両方多二死傷之者一云々（五月十二日）

去十一日官軍前鋒乗レ勝入二越中国一、木曾冠者義仲、十郎蔵人行家、及他源氏等迎戦、官軍敗績、過半死了云々（五月十六日）
伝聞、北陸官軍、悉以敗績、今暁飛脚到来、官兵之妻子等、悲泣無レ極云々、此事去一日云々（六月四日）
（『玉葉』寿永二年）

簡略な記述ではあるが、北国に向けて進発した平家軍が越前、加賀と転戦し、越中に至って大敗したという基本的な展開はつかむことが出来る。この時の平家軍と義仲軍の動向を平家諸本でたどると、それぞれの記述にはかなりの差がある。しかし白山への願書は読み本三本が共通して持つ記事で、付された日付に相違はあるが、願書そのものの文言は、僅かに表記の違いがあることと、延慶本に一部抜けている部分があること以外はほぼ同一である。つまり、白山願書奉納を持つというだけでは、他本とは違う盛衰記の白山に対する興味を指摘することは出来ない。しかし、盛衰記はこれまでに見てきたように、縁起の挿入や叙述の繰り返しなど、白山に関する記事に他本よりも意識を向けているようだと思われるのである。

二、源平盛衰記と白山縁起資料

次に、白山縁起に関する部分について見てみたい。盛衰記には、先ほど述べた巻第二十九の白山への願書の直後に、独自の白山縁起記事が挿入されている。また、前述の通り、巻第四の白山事件記事の中にもその縁起に言及した部分がある。

謹デ白山妙理権現ノ垂跡ヲ尋奉レバ、日本根子高瑞浄足姫御宇、養老年中ニ鎮護国家ノ大徳、神融禅師行出シ給テ、星霜既ニ五百歳ニ及デ、効験于今新ナリ。日本無双ノ霊峯トシテ、朝家唯一ノ神明也。
（巻第四「涌泉寺喧嘩」）

とあるのがそれで、簡略にではあるが白山縁起となっている。この記事が、延慶本・長門本には見られないものであ

ることも既に指摘した。この「日本根子高瑞浄足姫」すなわち元正天皇の御宇に、「鎮護国家ノ大徳、神融禅師」つまり泰澄が白山妙理権現を行ない出したという白山縁起は、巻二十九でさらに詳しく描かれることになる。

盛衰記以外の白山縁起としては、前述の『白山之記』や、『本朝続文粋』の「白山上人縁記」、加越能文庫所蔵の『白山記録十種』に収められた「白山大権現縁起」(9)、「白山年代記并由緒」、『続古事談』などの他、多くの資料が存在する。それぞれに内容の差異はあるが、泰澄が貴女によって啓示を受け、白山山中の池でまず九頭竜、次いで十一面観音を感得するというのが、泰澄を開祖とする場合の白山縁起の骨子であるようだ(10)。

この泰澄が、先にも述べたように白山の開山とされている。しかしこの人物の伝記については未詳の部分も多く、一般には『元亨釈書』巻十五の「越知山泰澄」と、巻十八の「白山明神」が基本とされている。その「越知山泰澄」には、諸泰澄伝のうち、天徳二年（九五八）に浄蔵の口授を門人神興が筆記したものを中心にまとめた、とあり、『泰澄和尚伝記』の奥書に、この伝記は浄蔵貴所の口筆を以って、神興聖人が注記したとあるのと符合する(11)。『泰澄和尚伝記』は『白山史料集』や『神道大系』に翻刻されており、底本は金沢文庫本の、奥書に「正中二年（一三二五）乙丑五月二十四日」の書写とあるものである(12)。また『白山史料集』によると、和尚伝の異本のうち、平泉本には「書本云、俗名通憲少納言信西本以保元元年丙子三月十八日自文庫盗取出、書写畢云云」との奥書があるという。

この、泰澄の伝記的資料として一般的な『元亨釈書』の泰澄伝及び白山縁起記事と『泰澄和尚伝記』のそれとを、盛衰記巻第二十九の白山縁起記事と比較し、文言が対応している部分に傍線を付した。

表二　盛衰記・泰澄和尚伝記・元亨釈書の白山縁起部分本文対観表

源平盛衰記　巻第二十九　三箇馬場願書事	泰澄和尚伝記	元亨釈書　巻第十八　神仙五
抑白山妙理権現ト申ハ、		白山明神者。伊弉諾尊也。
		初泰澄法師棲越前州越知峯。
昔越前国麻生津ニ、三神ノ安角ガ二男、越大徳神融禅師ト云人マシ〳〵キ。久修練行年積、難行精進日ニ新也キ。	白山行人泰澄和尚者、本名越大徳、（號）神融禪師也、俗姓三神氏、越前國麻生津三神安角二男也、	
	（中略）和尚於越知峯見白山高嶺雪峯、常念、挙登彼雪嶺、為末世衆生利益、可奉行顕霊神矣、	常望白山曰。彼雪嶺必有霊神。我当登彼乞顕応。
元正天皇御宇、養老元年ニ、和尚当国大野郡伊野原ニ遊止シ給ヒタリケルニ、	和尚至霊亀二年夢、以天衣瓔珞飾身貴女、従虚空紫雲中透出、告曰、我霊感時至、早可来焉、而日本根子高瑞浄足姫	霊亀二年。夢。天女瓔珞厳身。出紫雲中曰。霊感時至。蚤可戻止。
	元正天皇御在位、養老元年丁巳歳、和尚年卅六也、彼年四月一日、和尚来宿白山麓大野隈笞川東伊野原、乃凝観念、運呪功、喚天招地、摧骨屠肝、爰先日夢貴女屢現、命和尚言、	養老元年四月一日。澄徒白山麓大野隈笞河東伊野原。乃専心持誦。時前所夢天女現身曰。
一人ノ貴女化現シテ云、	此地大徳悲母産穢非結界、此東林泉吾遊止地、早可来、言未畢即隠矣、和尚驚此告乃臨彼林泉、日夜放大音聲礼拝念誦、（五）心月輪、阿字空門八葉白蓮素光中、速垂霊質、	此地大徳之母産穢之所。非結界之地。此東林泉。吾所遊止也。師移彼。言已形隠。
日本秋津島ハ本是神国也。我天神最初ノ国常立尊ヨリ跡ヲ降シテコノカタ、百七十九万二千四百七十六歳、	爰酬祈念、前貴女現告曰、我雖有天嶺、恒遊此林中、以此處為中居、	澄到彼。持念如前。天女又来曰。我雖在天嶺。恒遊此林。此林為我中居。

上上皇ヲ護、下下民ヲ撫、

吾本地ノ真身ハ在山頂、
往テ可礼ト云テ、化女即隠レ給ヌ。
和尚霊感ヲ仰テ
白山ノ絶頂ニ攀登、
緑ノ池ノ辺ニ居テ、三密印観ヲ凝シ、
五相身心ヲ調テ、祈念加持シ給ヒケレバ、

上護上皇、下撫下民、大徳諦聴、
日本秋津嶋、本是神国也、
国常立尊、乃神代最初国主也、
次国狭槌尊、次豊斟渟尊、次泥涅尊、（沙瓊尊）
次大戸道尊、大戸間邊尊、次面垂尊、惶根尊、
次伊弉諾尊、伊弉冊尊、謂之神世七代、
吾身乃伊弉諾（冊）尊是也、今號妙理大菩薩、
此神岳白嶺、乃吾神務国政時都（城）也、
吾乃日域男女元神也、天照大神、乃吾伊弉諾（冊）尊子也、其子（正哉吾勝々速日天忍穂耳尊、治天下三十萬歳、其子）天津彦々火瓊々杵尊、
治天下卅一萬八千五百四十二年也、
其子彦火々出見尊、治天下六十三萬七千八百九十（二）年也、

其子彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、治天下八十三萬六千四十二年也、（名之地神五代、）
人代第一国主神武天皇、
乃彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子也、
此天皇御宇七十六年也、
天皇生年四十六甲寅歳、謂諸兄及子等曰、
自天祖降跡以来、逮于今百七十九萬二千四百七十六歳也、
抑吾本地眞身在天嶺、
往而可礼、此言未訖、神女忽隠矣、
和尚今顕霊感奇異、弥仰佛徳掲焉、
乃挙登白山天嶺禪定、
居緑碧池側礼念加持、一心不亂、猛狂利強盛、

上護一人。下撫万民。大徳諦聴。
日本秋津嶋本是神国也。
国常立尊乃神代最初国主也。
次国狭槌尊。次豊酌渟尊。次泥火瓊尊。沙土瓊尊。次大戸之道尊。大苦邊尊。次面垂尊。
惶根尊。
次伊弉諾尊。伊弉冊尊。謂之天神七代。
吾是伊弉諾尊也。今號妙理大菩薩。
此神岳白嶺者。我主国之時都城也。
我乃日域男女之元神也。天照大神者我子也。
天忍穂耳尊我孫也。
其子天津彦彦火瓊瓊杵尊。

受祖天照太神敕、治此國。
始為地居。饗國三十一萬八千五百四十二生。彦火火出見尊。饗國六十三萬七千八百九十二年。
生彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。饗國八十三萬六千四十二年。是名地神五代。
人皇第一國主神武天皇者。
鸕鷀草尊第四子也。
在位七十六歳。
天皇年四十六始登皇位。辛酉之歳也云云。

吾眞身在天嶺。
大徳往見之。言已天女乃隠。
澄乃登白山天嶺絶頂。
居緑碧池側。持誦専注。

池中ヨリ九頭竜ノ大蛇身ヲ現ゼリ。
和尚重テ云、此ハ是方便示現ノ形、
全本地ノ真身ニアラジトテ、
咒遍功ヲ増ケレバ、
十一面観音自在尊、慈悲ノ玉体顕給ヘリ。
妙相遮眼光明身ヲ耀セリ。
和尚悲喜胸ニ満テ感涙面ヲ洗フ。
帰命頂礼シ奉テ云、
願ハ大聖本地垂跡、哀ヲ垂テ、
像末ノ衆生ヲ抜済利益シ給ヘト被申ケレバ、
爾時ニ観世音、
金冠ヲ動シ慈眼ヲ瞬シ給テ、
妙体速ニ隠レ給フ。
又和尚左ノ峯ニ登給ヘバ、
一宰官人ニアヘリ。
手ニ金ノ箭ヲ把リ肩ニ銀ノ弓ヲ懸タリ。
咲ヲ含テ語テ云、
我ハ是妙理大菩薩ノ神務輔佐ノ貫首、
名ヲバ小白山、別山大行事ト云。
大徳当知、聖観世音ノ化身也ト云テ隠レヌ。
又和尚右ノ嶺ニ登給ヘバ、
一の老翁有。語テ云、
我ハ是妙理大菩薩ノ神務、静謐啓沃輔弼也、
名ヲバ太已貴ト云。
蓋又西刹ノ教主、阿弥陀也ト云テ隠レ給ヒヌ。
是ヲ白山三所権現ト申也。
峻嶺高タトシテ、忉利ノ雲モ手ニ取ベシ、
幽谷深々トシテ風際ノ底モ足ニ蹈ツベシ。

凝三密印観、五相調身心、
咒遍満口、念力徹骨、
爾時従池中示九頭龍王形、
和尚重責曰、此是方便示現、
非本地眞身焉、
乃又十一面観自在尊慈悲玉躰忽現矣、
妙相遮眼、光明耀身、
爰和尚悲喜満胸、感涙洗面、稽首
帰命、頂禮佛足、乃白言、
像末衆生、必抜済利益、
爾時観世音、
揺金冠、瞬慈眼、
乃領納、未及再拝妙躰早隠矣、
貴哉妙哉、歓喜涙幾乎、
乃亦和尚徑左岳澗、向孤峯、
値一宰官人、
手握金箭、肩係銀弓、
含咲語言、
我是妙理大菩薩神務輔佐行事貫首、
名曰小白山列山大行事、
大徳当知、聖観音現身、言中乃隠矣、
和尚挙右孤峯、
値一奇服老翁、神彩其閑、乃語曰、
我是妙理大菩薩神務清謐啓沃輔弼、
名曰太已貴、
蓋又西刹主也、乃共言失矣、
和尚居此峯、日夜難行苦行、
峻厳高々忉利雲可取手、
幽谷深々、風際底可履足、
効験遍聞、

忽九頭龍出池面。
澄曰。是方便現躰。
非本地眞身。
持念弥確。
頃刻十一面観自在菩薩。
妙相端厳。光彩赫熾。
澄稽首
禮足白言。
像末衆生。願垂救拯。
于時菩薩
揺金冠。瞬蓮眼而許之。
拝不畢三。妙體已隠。
澄又渡左澗。上孤峯。
値一偉丈夫。
手握金箭。肩横銀弓。
含笑曰。
我是妙理大菩薩之輔也。
名曰小白山大行事。
大徳当知。聖観自在之變身也。言已乃隠。
澄又昇右峯。
見一奇服老翁。神于閑雅。語曰。
我是妙理大菩薩之弼也。
名曰大己貴。
西刹主也。言已又隠。

効験一天ニ聞エ利益四海ニ普シ。
サレバ木曾義仲モ、眼ヲ塞デ白山ヲ礼拝シ、掌ヲ合権現ニ奉帰、敬先致祈誓ケリ。

挙レ世尚レ之焉、

自レ此霊感益顕著也。澄嘗語レ人曰。妙理菩薩曰。我山中。一草一木。無レ不レ我眷属之所居。一萬眷属。妙徳降迹。十萬金剛童子。遍吉垂化。五萬八千采女。堅牢女天之變作也。
賛曰。或言。妙理菩薩。已言　天照太神者我子也。子今後二白山一何。予曰。伊勢神宮。朝廷立為二宗廟一。白山雖一伊弉諾尊一。顕應在レ後。我又且従二朝禮一也。然以下不レ視二神次一。唯因二吾法之先後一為二排老一耳。

『泰澄和尚伝記』が、盛衰記の持つ白山縁起部分と大変近しいものであることが分かる。盛衰記と元亨釈書の資料的な関係は先行研究においても指摘されているところだが、この縁起に関しては、直接の依拠関係を断じるわけには行かないものの、盛衰記には明らかに元亨釈書よりも泰澄和尚伝記と強い関連があることが伺える。盛衰記が省略してしまった神世七代の列挙は、白山の縁起を語る上では重視されていたのか、元亨釈書にも、また「白山大権現縁起」やその他幾つかの白山縁起関係資料にも収録されており、またそれらは七代の神々の名が古事記ではなく日本書紀の方に倣っている点でも共通している。ただ、盛衰記はその部分を省略したとはいえ、国常立尊から百七十九万二千四百七十六年であることは略さずに書いて、丁度神名が省かれただけで縁起の内容としての大枠はそのままになっている。また対観表では中略としたが、泰澄和尚伝記前半の泰澄その人の生い立ちを述べる部分は盛衰記では採用されず、さらに白山に登るまでの貴女との詳細な遣り取りも省略されている。盛衰記は、泰澄のことよりもむしろ白山

の霊験そのものに的を絞って書こうとしているようである。あるいは和尚伝と盛衰記の間に資料が存在したかもしれず、盛衰記が直接依拠した資料には泰澄の生い立ちや神名の列挙はなかったとも考えられる。しかし、白山縁起にとっては泰澄の特異な少年時代や貴女との応答、神名の列挙は重要事項であるらしく、すべてとは言わないまでも、多くの資料に書かれている。つまりこれらは白山側にとって、開山の泰澄を語る上で無視できない要素であったと思われるのである。盛衰記は、戦にあたって義仲が白山へ願書を奉納したこと、倶梨伽羅山で平家軍に圧勝したことの流れの中にこの縁起が位置しているため、泰澄の偉大性を語るよりは今ある白山の神威を強調しようとし、そのために、開祖の伝承よりも、白山権現の示現に重点を置いて縁起記事を挿入したものと思われる。

なお、白山関係の縁起・本地に関する記述として、再び巻第四に注目したい。白山事件記事の中に、盛衰記は次のような記事を持つ。

白山七所ノ其中ニ、佐羅ノ早松ノ御輿ヲ奉飾。本地ハ不動明王、悪魔降伏ノ憤怒形、賞罰厳重ノ大明神也。（中略）六日ハ仏ガ原、金剣宮ヘ奉入。此明神ト申ハ、嵯峨天皇御宇弘仁十四年ニ、此所ニ奉祝テ三百五十余年也。本地は倶梨伽羅不動明王也。魔王ト威勢ヲ諍テ、邪見ノ剣を呑ミ給フ。　（巻第四「白山神輿登山」）

ここでは佐羅の宮の本地と、金剣宮の縁起、本地が述べられている。この記事は延慶本・長門本には見られない。また、巻第二十九の倶梨伽羅山の戦いで平家軍が大敗した後谷から火炎が立つという霊験譚は延慶本・長門本にも描かれているが、そこでも盛衰記のみが

金剣宮ト申ハ、白山七社ノ内、妙理権現ノ第一ノ王子ニ御座。本地ハ倶梨伽羅不動明王也。守国土為降魔民トテ、弘仁十四年ニ此砌ニ跡ヲ垂。平家已ニ仏法王法ノ怨敵也ケレバ、神明合力給ヘリト云事掲焉也　（巻第二十九「砥並山合戦」）

と、簡略ながら金剣宮の本地に言及する。金剣宮が白山妙理権現の第一の王子で本地が不動明王であるというのは、

『神道集』の「白山権現事」にもあり、また、『白山之記』にも「白山七社本地垂迹事」として、白山第一王子の金剣宮が本地倶梨伽羅明王であること、佐羅宮の本地が不動明王であることが記されている。

おわりに

以上のように、盛衰記における白山に関する記事を、主に延慶本・長門本との比較を中心に見てきたが、総じて盛衰記には白山関係の記事に対する積極的な姿勢が見られると思う。また、白山権現の縁起については金剣宮も含めると数度言及していて、中でも中心となる巻二十九の縁起記事は、泰澄和尚伝記に何らかの関係を持ちつつも、あえて泰澄その人の生い立ち業績ではなく白山権現の化現に重点を置いたものとなっていたことを確認した。

これまでにも、盛衰記独自の明神化現譚を、叡山文化圏との関わりという観点から読んできたが、本稿で取り上げた白山及び白山権現に関わる盛衰記の積極的な記述態度も、白山権現が単なる地方の有力な権現であるというだけでなく、当時、叡山末であったということと思い合わせると、納得できると思う。加賀の馬場の中心は白山本宮（延喜式にいう白山比咩神社）であったが平安時代中期以降は別当寺の白山寺に実権が移り、同様に越前の馬場（白山中宮）では別当平泉寺、美濃の馬場（白山中宮または白山本地中宮）では長瀧寺が実権を握った。これらの寺が、平安時代末期には相次いで延暦寺末となったのである[13]。白山事件叙述での収録文書の多さも、それらの出所を直ちに延暦寺及びその周辺に特定することは困難であるとしても、盛衰記の、叡山関係の記述に対する強い関心の表出と読むことは出来ると考えるのである。

註

(1)『泰澄和尚伝記』の現存最古の写本は、正中二年（一三二五）書写の金沢文庫本であり、『元亨釈書』（一三二一成立）巻十五「泰澄伝」、巻十八「白山明神」との資料的関係の観点から、原本成立時期に付いては論が分かれている。

(2)加賀の馬場のみ、泰澄開山を養老元年とする社伝の他に、泰澄と関わりのない崇仁天皇七年説、応神朝説、欽明朝説、天智天皇六年説の、四つの創立伝承がある。

(3)梶原正昭氏はこの箇所を取り上げられ、平家物語は目代の暴状を強調しているが、この紛争が本質においては土地の帰属をめぐっての国衙対衆徒の争いであることを指摘された。（『平家物語』の一考察――〝鹿の谷〟事件と白山事件――」「学術研究――人文・社会・自然――」第十号　一九六一年十一月）

(4)石野春夫氏『京都へ行った白山の神輿』（光陽出版社　二〇〇一年五月）

(5)安藤淑江氏「延慶本平家物語における資料蒐集の一側面」（「国語と国文学」第七百十号　一九八三年四月）

(6)鈴木彰氏「『平家物語』における〈白山事件〉――文書の活用と事件像の創出――」（「文学」第三巻第一号　二〇〇二年一、二月）

(7)『古事談』第五　神社仏寺

(8)山岸共氏「白山信仰と加賀馬場」（山岳宗教史研究叢書10『白山・立山と北陸修験道』名著出版　一九七七年）

(9)冒頭を欠き、語の並びが若干違うが、この縁起とほぼ同じ「加州石川郡白山縁起」が『群書類従』に収録されている。

(10)『神道集』の「白山権現事」は、白山権現の最初の示現についての説が一つではないことを指摘している。また、盛衰記にもある阿弥陀と聖観音の垂迹について触れている。

(11)この奥書から、『泰澄和尚伝記』の原本が『元亨釈書』の典拠となっているとする論がある一方で、『泰澄和尚伝記』が『元亨釈書』十五、十八の泰澄伝と白山記事を統合して引用したと見る論もあり、資料の先後関係に付いては論の分かれるところである。

(12)『白山史料集』には金沢文庫本の他、尾添密谷家所蔵史料の和尚伝と、平泉本、大谷寺本、大谷寺別本の奥書が掲載されている。

(13)長瀧寺・平泉寺は一〇八四年、本宮白山寺は一一四七年に、それぞれ延暦寺末となった。

引用本文は、以下のものに依った

源平盛衰記／『源平盛衰記　慶長古活字版』勉誠出版

覚一本平家物語／日本古典文学大系『平家物語』岩波書店

泰澄和尚伝記／『神道大系』神社編　若狭・越前・加賀・能登國

古事談／『新編増補　國史大系』第十八巻

玉葉／『玉葉』第二　国書刊行会

元亨釈書／『新編増補　國史大系』第三十一巻

付記　本稿は、軍記・語り物研究会　第三五四回例会（二〇〇三年七月二十七日　於　法政大学）での口頭発表を元にしています。会場にて多くの方々に御意見・御教示をいただきました。深謝申し上げます。

（つじもと　きょうこ・関西学院大学大学院文学研究科研究員）